

# 観光地を生きる人々

—中国・貴州省西江（シ・ジャン）ミャオ寨<sup>さい</sup>の観光人類学的研究

洗 麗珊(セン レイサン)

キーワード：観光人類学、地域関係、観光開発、地元民、経済

本論文は、血縁関係やそれに基づく親族関係を重んじる地域社会における観光開発の実態に注目し、地域社会における社会関係や文化と観光実践がどのように相互作用した上で現在の観光現場が成り立っているかを考察する。特に、異なる属性を持つ各アクターが地域社会の影響を受けながら、観光地を生きる実践に焦点を当てる。

これまでの観光人類学的研究において、観光地、特にエスニック観光地に関する研究では、ホストとゲストの関係や、観光が地域社会に与える影響に焦点が当てられてきた。これらの議論では、ホストとゲストを権力構造の中で捉え、ホストは弱者で抑圧される存在、ゲストは経済的・権力的に強くてホストを抑圧する存在として記述する傾向がみられる。この傾向は、観光化が地域社会に与える影響に関する議論にも反映されている。観光によってもたらされる文化の変化について、変容なのか創造なのかということが盛んに議論されてきた。しかし、どちらにせよ、地域社会は観光化からの影響を一方的に被る受動的な存在として描かれてきた。

こうした研究の動向は、観光開発に存在する権力格差がもたらす問題の発見や、不利な立場にある地域社会の維持に一役買っている一方、新しい問題に繋がっている。それは、地域社会の側の力が無視されてしまい、それを弱い立場に置く図式の再生産につながりかねないことである。

そこで本論文では、従来の「ホストが弱くゲストが強い」という枠組みや観光開発が支配的な力を持ち、地域社会がその影響を受動的に被るという描き方ではなく、地域社会の日常生活や文化を担うホストの力が、観光実践への参加を通じてどのように可視化されるのかを問う。また、観光化は地域社会に大きな影響を与える一方で、地域社会からの影響を受けながら、様々なアクターの相互作用の中でローカライズされてきたことを述べる。本研究のフィールドである西江ミャオ寨は、貴州省はもとより中国でも有名な少数民族の観光地であると同時に、深い地域の社会関係を有し、それが村人の生活のあらゆる面に影響を与え、村民の実践を通じて観光化のありようにも影響を与えていることが調査によってわかった。

そこで、本論文では、中国・貴州省西江ミャオ寨をフィールドとし、地域社会の文化や規則を手がかりとして、村を生きる研究者、地元民（現場では「本地人」という言い方が使われている）、外来経営者に注目し、文化人類学の視座より観光化された伝統的な村の中で、異なる属性を持つ人々がどのように生活しているかを記述しながら、地域社会と観光実践の関係性を問い直す。

本論文は、2019年9月、2021年10月～2022年1月、2023年5月～7月の計3回のフィールドワークと、その後のSNSを活用した追加インタビューから得られた情報をもとに作成された。これらの調査期間における現地での参与観察や対話、さらに現地の人々との持続的な交流が本研究の基盤を形成している。

序章は研究目的と本論文の構成を紹介する。第2章は先行研究を整理する。第3章は議論を展開するための基本状況を紹介する。第4章は農業と観光業という新旧の生業の交替の状況を手がかりに、観光化が地元民の生活にもたらす影響や地元民からの対応の仕方をみる。観光化が拡大し続けることを背景に、昔の主な生業であった農業と観光業の交替について論じる。その結果、観光化が勢いよく進んでいる中でも農業に従事する人々がいることがわかった。その理由としては、農地への愛着、伝統文化の維持などが挙げられるが、観光化がもたらす貧富の差や不安定に対して、農業を維持することは一つの解決策とされることがわかった。続いて、研究者（第5章）、地元民（第6、7章）と外来経営者（第8章）と3つのアクターの実践から、地域関係や文化を重視する既存の村をもとに作られた観光地を生きるには、異なる属性を有するアクターの実践を描く上で、地域社会と観光化との多様な関係性を議論する。

分析の結果、各アクターが観光地で長期間生活する際、彼らは異なる問題に直面し、それぞれの方法で対処することが求められるが、その過程において、地域社会は無視できない影響を及ぼしていることがわかる。

研究者の場合、研究者の「観光客化」を観光化の結果とすると、地域社会に近づけることは脱観光客の実践において重要なキーポイントだと考えられる。これまで第三者として観光客が陥る苦境を指摘してきた研究者は今や同じ状況に直面し、その解決に迫られるようになる。研究者も、調査協力者を一方的に観察したり、地域の活動に参加したりするだけでなく、フィールドワークの過程で地域社会からの情報を収集し、それによる影響を絶えず受け取り、内面化していく存在である。また、観光客に関する議論は、その問題点を指摘するだけでなく、その行動を観察し、特定の観光地で形成された観光客像を究明することで、その強固に存続するイメージによる影響を打ち破る方法を実践の中で見出すことが重要であることを指摘する。

二重価格と地元清掃員の雇用の事例では、貨幣による商品や労働力の購入は観光化がもたらす市場経済の行為であるが、それらは実際には西江ミャオ寨の社会関係に深く組み込まれていることがわかる。二重価格の事例において、貨幣と商品の取引は社会関係を維持するための重要な手段となっている。麺屋の経営者は、観光価格より安い地元価格で地元民に食事を提供することを通じて、互いに面子を立てたり、互助関係を維持したりしている。民泊の地元清掃員の雇用において、オーナーは労働の対価を支払うからといって、地元清掃員よりも優位な地位に立つことはなく、むしろ地元清掃員の無断欠勤に対する非難を控えている。それは、ここでの雇用関係が地域の習慣を支える方法として成り立ち、それゆえに地域関係に左右され、地域関係に深く影

響されているからである。この両者における相互の抵抗、交流、統合、共同作用のプロセスの中で、現在の観光現場が成り立っているのである。

エスニック観光において文化観光は重要な部分であり、観光客のまなざしに応えるために変容が生じた文化がしばしば議論の対象とされている。一方、事例にあげたミャオ族の普段着のような、観光客には人気がなく、観光客による変化があまり見られない文化が議論の焦点から外されている傾向がある。しかし、これらの文化に観光を語る上で意義がないわけではない。なぜなら日常的に実践される地域文化は、観光客が直接的に関与していなくても、観光地を生きる担い手としての地元民に間接的に影響されているからである。むしろ、このような、観光資源の対象にされず、観光客との関係が希薄に見えるような文化を議論することは、「観光を生活の一部、選択肢の一部として」[久保 2014:295]捉える上で重要であろう。